

まなびの広場
稲進会
教室通信

彩色いろいろ

「凸凹の中に魅力がある」

家に帰ってきたら、即机に向かい学校の宿題を済ませる。宿題が終わった後は、夕食の準備を手伝うと同時に風呂を沸かし、夕食後、1時間ほど家族と一緒にテレビを見た後は、風呂に入ってもう一度机にむかい明日の塾の予習と復習。もちろん成績優秀、部活動でも中心選手として活躍、生徒会の役員もつとめ友人からの信頼も厚い。親孝行で兄弟姉妹にも優しい。

このような子いかかですか？

ぜひうちの子どももそうなって欲しいと思われませんか？

日曜劇場「流星ワゴン」(TBS)では、家庭ではいわゆる完璧な夫が、完璧ゆえに妻との距離が離れていく姿が描かれています。(※この後、ネタバレの可能性もありますのでご注意ください)

常に妻と子どものことを考えいつも優しく家庭を最優先にしてきた。食器の片付けが大変だろうと、勝手に食器洗浄機を買ってきてあげ、経済的な心配をかけさせないために毎月の様々な支払いをすべて夫が考え、妻に迷惑がかかるからと同僚を家に呼ぶこともない。そんな夫から妻は離れていきます。理由は、完璧だから、でした。

人は他人に完璧を求めてしまうことがあります。身近な存在にこそそうしてしまうことが多いのではないのでしょうか。

もし現実に完璧な存在であったとしたならば、その人の魅力は完璧な分(完璧だからこそ)減少していつてしまうものなのかもしれません。人の魅力は凸凹の中にこそ輝きがあるのだと思います。レゴでの製作も、造形面は苦手でもすごく高度な仕組みが作れることも魅力的ですし、勉強においても全教科完璧もいのですが、社会だけ、しかもある時代に関してめちゃくちゃ詳しいことにも魅力を感じます。

受験を始めとしバランスの良いことで子どもを評価しがちな世の中である気がします。もちろんバランスが良いことも素晴らしいことです。でも、バランス良くさせなきゃと過剰に思うことよりも、子ども一人ひとりの長所も短所も受け止め、輝けるところをより輝かせてあげる、そうした意識で大人が接することの方がもっと大切なのではないのでしょうか。

「普通と言われる人生を送る人間なんて、一人としていやしない。いたらお目にかかりたいものだ。」

(アインシュタイン)

奥松

教室の風景

真似る

「学ぶ」の語源は「まねぶ（真似る）」という説がある。ただし、完全にコピーしてパクるということではない。始めのうちはお手本を真似して、そこから努力して学び、その上に自分のオリジナリティを出すことが「学ぶ」ということなのだ。

振り返ってみると、私自身も子供のころはプロを真似していました。私は絵を描くことが好きだったので、好きな漫画やゲームのキャラクターを毎日のように模写していました。だんだん模写がうまくなると、今度は、ポーズを変えてみよう、衣装を変えてみよう、オリジナルキャラクターを作ろうってなるんです。もちろん自分のオリジナリティを出そうとすると、最初のうちは全くうまく描けませんけど(笑)

レゴのレッスンでも、1から自分で作るのが苦手な子がよくいます。でもお手本があったり、説明書があると、忠実に真似をして作品を作ることができたりします。帰り際に私は必ず、「お家でも、今日学んだ仕組みを使って何か作ってみてね」と伝えます。少しでも繰り返して作り、そこから何かを発見をして、その子なりのオリジナリティが引き出されればよいかなと考えています。たぶん、最初のうちはうまく出来ないと思いますが、失敗を繰り返しながら上達していくのだと私は信じています。

インストラクター 伊勢 豊

作品★紹介

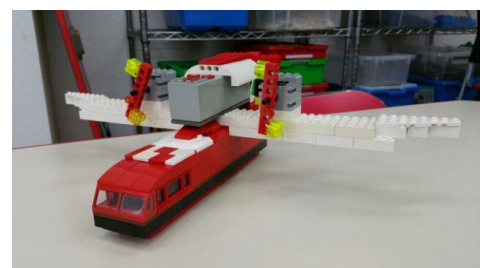


『一本足の鳥』

左右のバランスがきちんととれています。顔も鳥の雰囲気が良く出ていますね。



『モ...』
ます。豆もバクバク食べてしま



『飛行機』

コクピットがかっこ良く出来ていますね。プロペラもちゃんと回ります。